

宮島の帰り、平和記念公園へ向かう途中、五日市、光禪寺に立寄り、ニック・ユソフの墓参を行った。京都の「碑道」に入ると、  
あのニック・ユソフ君のいたずらっぽい顔が、少しでもなごんではほしいと願っている。ニック・ユソフ君と書いたことに御理解いただきたい。謝り、アーヴィング・カーネギーの墓参。  
文責と世話人：歯学部 菅野義信  
（著者）中島洋介と西文泰子

## 第28回 サイド・オマール忌



円光寺山門

今日の円光寺（京都市左京区一乗寺）は、夜来の雨一段と激しく、境内の道は川とまがうほどである。

9月3日は南方特別留学生として、被爆當時広島文理科大学に学んでいたオマール君の命日（後掲直木由太郎氏玉稿参照）である。京都の園部家の御尽力で今年もオマール忌が催された。集まる者、京大前及び現工学部長をはじめ13名。広大からは筆者と折から京阪地区を訪れていた法・経中野事務長補佐と2名であった。

雨で法要は本堂。正11時古賀住職の読経がはじまる。運慶作と伝えられる御本尊の千手観音の前には、オマール君の位牌が安置され、ゆれるろうそくの灯に明るく暗く小刻みに表情をかえている。



祭壇「故サイド・オマール之靈位」と記された位牌がまつられている。

その後、山端平八茶屋での懇親会を終え、オマール忌を通じての平和の存続と参会者の多幸を祈りつつ散会したのは午後1時半。雨は小やみになっていたが、加茂川は水かさが増し、茶色い奔流となって岸をかんでいた。

（著者）広島大学原爆死没者慰靈行事委員会幹事会幹事長 片島三朗 記



古賀住職の法話

## オマールの墓と先生の墓碑銘

財団法人長岡病院長  
直木由太郎

—「新しき村」昭和63年12月号より転載—

オマール君  
君はマレーからはるばる  
日本の廣島に勉強しに  
来てくれた  
それなのに君を迎えた  
のは原爆だった 鳴呼  
實に實に残念である  
君は君の事を忘れない  
い日本人あることを記  
憶していたきたい

武者小路實篤

これは第二次大戦中に「南方特別留学生」として来日し、広島の原爆に遭って死亡したマレーシア出身のサイド・オマールという少年（当時19歳）の墓前の石に刻まれた武者小路先生の墓碑銘の詩です。

オマールの墓は京都洛北の円光寺にあります。オマール少年は広島で原爆に遭い、東京の留学生の本部へ引き上げる途中、休養のために京都に立ち寄りましたが、症状が悪化して京大病院に入院、昭和20年9月3日に死去しました。

オマールの遺体は京都市営の南禅寺大日山墓地に埋葬されましたが、このことを知る人は少なく、墓に立てられた木碑は時の経過と共に朽ち、草に埋もれて墓の在り所も分らぬ程になったということです。

昭和32年にオマールの姉のウンター・アジス夫人という人が来日して亡弟の墓を探したが見付けることができず、空しく帰国したということがありました。

昭和33年、これ等のことが「週刊朝日」に報ぜられました。それを見た洛北八瀬の「平八茶屋」の園部英文さんは、オマールの墓を朽ちさせるのは「京都の恥」として建墓の志

を起しました。弟の園部健吉氏と共に非常な努力を傾注されました。

園部さんは「新しき村」の京都支部と深い関係のある人で、比叡山の麓、八瀬の「平八茶屋」に武者小路實篤先生を迎えて村の会を開かれたこともあります。

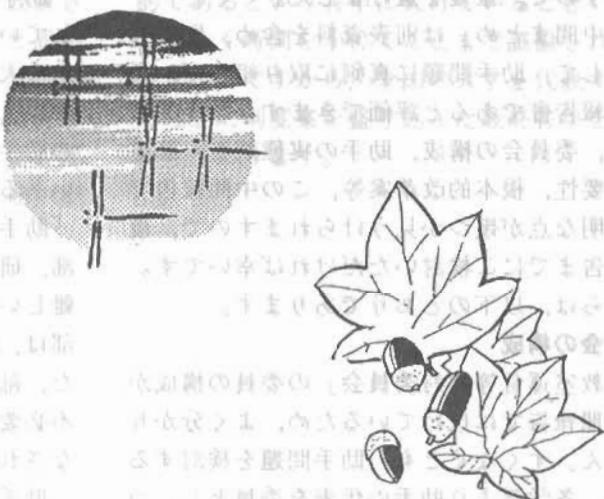
オマールの墓を作るに当って、園部さんは武者小路先生に墓石の碑文を書いて貰うことを思い立たれ、上田慶之助さんに先生との仲介を依頼されました。上田さんは先生にお願いをされ、やがて先生から送られて来た墓碑銘の書を上田さんが園部さんに届けられたのでした。

建墓の計画が進みつつあった昭和35年5月、園部さんは脳内出血で倒れて病床に就かねばならぬこととなり、弟の健吉氏が兄の志を継いでオマールの遺族との連絡、回教様式の墓地の設計、その他多くの難問を非常な努力によって克服されて立派な墓が完成し、オマールの命日に当たる昭和36年9月3日、南禅寺大日山墓地から円光寺へ改葬されたのでした。

その日、英文さんは病床にあって建墓式に参列することができず、御子息撮影のハミリフィルムによってその感激を味わったということです。英文さんは、「私は18歳の時、南米に行きました。オマールさんと同年でした。そのせいもあって、週刊誌で市営墓地の碑が朽ちかけていると知った時は、じっとしておられませんでした。自分の息子のような気持がしましたね。これでいつ死んでもよいと思っています。が、建墓式だけには参列したかった」と取材に来た週刊誌の記者に告げておられます。英文さんは、その後、昭和40年5月に逝去されました。建墓を立派に仕上げられた弟の健吉氏は、「オマール少年の墓」と題して自費出版された本の中で、「結局建墓発願した英文兄は、立派な墓を見ずに亡くなられたが、病床で晴々とした顔で『よくやったネ』と云った言葉は忘れられない思い出でもある。」と書いておられます。

円光寺に墓の建てられた昭和36年以来、毎年オマールの命日の9月3日に墓前祭が営まれて来ましたが、昭和49年に、「オマール君の墓を守る会」が結成されて園部健吉氏が会長となられました。然しその園部氏も昭和58年5月に他界され、その後は健吉氏の末夫人宏子様が御子息と共に会を維持しておられます。近年は墓前祭は9月の第1日曜に行われることとなって、今年は9月4日に法要が営まれました。

本年8月6日、原爆の日の夜、NHKテレビの全国放送で「わが心の広島——あるマレーシア人被爆者の青春」という番組が放映されました。オマールと共に広島で被爆したマレーシアのアドル・ラザック氏が原爆の日を前にして来日し、当時の思い出を語った感動的な番組でしたが、オマールの眠る円光寺を訪れて墓前に立ち、亡き友を偲んで号泣したラザック氏の姿は見る者の涙を誘わずに



はおきませんでした。

又、オマール少年の京大入院時の主治医であった浜島義博京大名誉教授がラザック氏の傍らにあって、武者小路先生の墓碑銘の詩を心を籠めて誦せられたのが実に感動的でした。

墓碑銘の詩を先生と園部さんとの間に橋渡しをされた上田さんはこの詩に特に深い思い出をお持ちであったことと思います。8月6日に放映されたこのテレビを上田さんに是非見て頂きたいものと思ったのですが、放送の3日前の8月3日に上田さんはおなくなりになり、その御讣報を聞かねばならぬこととなってしまいました。誠に残念の思いに堪えませんでした。

オマールの墓を知る人は少なく、先生の書かれた墓碑銘に就いて知る人も少ないと 思いますので一筆させて頂きました。